

受賞者氏名	佐藤 未央子
所属	文学部 日本文学科
受賞年月日	2023年3月1日
国内・国外	国内
授与機関等名称	文化庁
受賞名	令和4年度(第73回)芸術選奨 文部科学大臣新人賞(評論等部門)
受賞(研究)内容詳細	 <p>本書は、映画を愛した小説家、谷崎潤一郎(1886～1965)が執筆した映画小説や脚本等について論じたものである。西洋で誕生した映画は明治後期の日本に輸入され、大衆娯楽として普及していった。早くから映画に親しんでいた谷崎は、映画は新たな芸術・メディアとして有意義なものになると論じ、小説にも題材として取り入れた。1920年には大正活映の顧問となって脚本を執筆し、ロケ撮影に参加するなど制作にも携わった。大正活映を1年半ほどで離れた後も映画に関する小説や批評を発表するが、徐々に関心を失っていく。そこで筆者は、なぜ谷崎は映画に強く惹かれ、離れていったのか、という問いを立てて研究を行ってきた。</p> <p>本書ではまず、戦前における谷崎と映画の関わりについて概説し、作品としては①映画化は実現できなかったが、新たな表現方法を提示した小説・脚本——「人面疽」(1918)、「月の囁き」(1921) ②映画女優に対する監督や観客の欲望を描いた小説——「肉塊」(1923)、「青塚氏の話」(1926) ③映画を主題としないが、その在り方を考えるのに示唆的な小説——「魔術師」(1917)、「アゾ・マリア」(1923)、「春琴抄」(1933) を取り上げ、各テーマに沿って論じた。研究方法としては、映画関連資料(映像や雑誌記事など)を中心とした同時代言説と照らし合わせながら作品を解釈する実証的なアプローチを通して、映画という存在そのものに対する谷崎の思考を跡付けた。</p> <p>本書は主に、谷崎がいかに映画を語ったかという観点から考察を進めてきたため、数多ある谷崎作品の映画化には十分に論及できなかった。谷崎が映画から離れたのは昭和初期の映画界の状況に要因があるとみられるが、その検証も余地を残す。これらを主な課題として、今後も谷崎と映画に関する研究を進めていきたい。</p> <p>【関連サイト】 blog 水声社:書籍紹介 http://www.suiseisha.net/blog/?p=16343 文化庁:受賞者一覧、贈賞理由など https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/93842101.html 法政大学文学部:受賞報告 https://www.hosei.ac.jp/bungaku/info/article-20230302124150/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54</p>